

続・吉田宗恂とその周辺 ―コンピュータと図書館を活用して―

## 時慶記のキリシタン(7) 道三流医術の系譜

島野達雄

本稿では道三流医師の事績を述べる前に、初代道三と比肩する初代意安・吉田宗桂は、イエズス会宣教師ヴィレラと旧知の「パウロ意安」とよばれるキリシタンではないか、とする姉崎正治博士の吉田宗桂キリシタン説を紹介する。

続いて、キリスト教に入信した初代道三（一溪）直門の曲直瀬玄朔・施薬院全宗・秦宗巴の三人について、伴天連追放令・文禄の役・秀次切腹事件との関わりを明らかにする。

あわせて昭和戦前に流布した秀次キリシタン説を紹介し、最後に秀次事件の真因を大胆に想像(?)してみたい。(以下では、『時慶記』第一巻を①、第七巻を⑦のように書く)。

### 1. 姉崎正治の初代意安・吉田宗桂キリシタン説

吉田角倉家で初めて「意安」を名乗った吉田宗桂(1512-1572)は、天龍寺の策彦周良と二度(1539年と1547年)渡明《策彦入明記》し、帰朝後の天文19年(1550)には一条邸で13回にわたり『医方大成論』を講義した《言継卿記》ことで知られている。

キリシタン研究の先駆者の一人、姉崎正治は、『切支丹伝道の興廃』(同文館1930年、以下同書の頁)で吉田宗桂は法名をパウロというキリシタンではないかと推定している。

1559年(永禄2年)、日本布教長コスメ・デ・トルレスは宣教師ガスパル・ヴィレラに都地方の布教を命じた。堺にやってきたヴィレラが市街を見物していると、「偶然、山口大内氏の典医であったパウロエサン Paulo Yesan<sup>[1]</sup> [多分吉田意安]に逢い、それから多少その知人の間に説法を試みるを得た」(115p)。

「たぶん吉田意安」とは心もとない言い方だが、西欧側史料<sup>[2]</sup>とくにフロイス『日本史』の原文にもとづき、初めて吉田宗桂キリシタン説を唱えた姉崎正治の功績は大きい。

この部分の昭和7年のフロイス『日本史前篇』高市慶雄訳は、下の通りであり、姉崎正治の文章とは若干異なる。

伴天連(ヴィレラ)が伴侶(コンパニオン)等と共に、(堺の)町内を見物している折、偶然にも、さる山口出身の切支丹に出会った。此の者は身分ある医者で、山口王の死に際して、国を追われたものであった。名はパウロ意安 Paulo Yesan と云い、非常に敏く見識の優れた人物で、年の頃は五十以上と見受けられた。

偶然出会ったのだから、ヴィレラとパウロエサンつまり宗桂とは面識があったのだろう。

続いて、ヴィレラが京都で將軍足利義輝に面会するため、「先に堺で医者パウロ意安から貰った紹介状を用いて」、「建仁寺塔頭永源庵主に会いにいった」(117p)。

姉崎正治は、「山口で信徒になったパウロエサンは、大内氏の医師であったが、動乱に主人に殉死した。日本歴史に現れる吉田意安ではないかと思われる」と述べる(432p)。

二度の渡明の際、周防国の国主・大内義隆(1507-1551)の力を借りたことは言うまでもないが、宗桂が「大内氏の医師」で「主人に殉死した」とする史料は目下のところ見当たらず。

ない<sup>3)</sup>。松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス日本史』は、「彼は身分のある人で、国主〔大内義隆〕の死に際して、放逐されて来た非常に良き医師であった」としている。

姉崎正治は、「パウロ養方軒（ヴィセンテ洞院の父）やパウロ意安の如き有力な医師に加えて、次の時代には当時第一の名医曲直瀬道三の改宗」などの「宗教の宣伝と医術との連絡」（158p）は、日本のキリスト教受容に画期をもたらした旨、述べている。

## 2. 初代・曲直瀬道三一溪 —キリスト教に入信

道三流医術の祖、曲直瀬道三一溪（1507-1594）は、田代三喜（導道）が明から伝えた、金元時代の李東垣・朱丹溪による「察証弁治」の臨床理論を重視し、日本医学中興の祖といわれる。主著『啓迪集』は元亀2年（1571）成立。勅命<sup>4)</sup>により題辞は策彦周良が書いた。

フロイスによれば、天正12年（1584）、78歳にしてキリスト教に入信している。このとき日本人修道士ヴィセンテ洞院が果たした役割については、H.チースリク「イルマン・ヴィセンテ洞院」が詳述している。この年、一溪の一番弟子とも言える曲直瀬玄朔（1549-1632）は36歳。玄朔もキリスト教に入信した、と考えるのが自然であろう。

一溪の『時慶記』の記事は、極めて限られている。生前の記事は3件しかない。

延命院（玄朔）・亨徳院（一溪）へ御礼ニ行、二十疋ツツ遣候（①天正 19.1.28）

従亨徳院（一溪）以宗為年頭礼在也（①天正 19.1.29）

亨徳院（一溪）へ折箱一遣、返礼在之（①文禄 2.10.6）

「以宗為」は「宗（宗家）たるを以て」と読むのであろうか。この記事から『時慶記』の記主西洞院時慶は道三流医術につながる医師であったことがわかる。

一溪は文禄3年（1594）88歳で没した。葬地の西山浄土宗十念寺<sup>5)</sup>には墓石が現存する。

為一溪忌日精進如例、普門品（ふもんぼん。観音経）を誦候、抜白毛（②慶長 5.1.4）

齋（とき）了廟参、昨日米二斗如例遣、今日布施五十疋（一疋=十文）、僧一人アリ、十疋、下人ニ包銭如例三十文ツツ遣、霊供五膳、其外法界一、曲庵ノ廟ニ三口アリ、洞雲院殿・宗林ノ新廟ヘモ水ヲ手向、一溪ヘモ廻向シテ帰、内儀同心候、御福ハ無来儀、十疋布施アリ、曲庵ノ代ニ三匁遣分也（④慶長 10.7.9）

一溪とその学統に関する研究は、2015年に武田科学振興財団・杏雨書屋が発行した『曲直瀬道三と近世日本医療社会』がもっとも詳しく、資料集としての価値も高い。

## 3. 二代・曲直瀬道三玄朔 [その1] —文禄の役で高麗へ

既刊『時慶記』①～⑦の総ページ数2136頁のうち、時慶の家族や同僚の公家たちを除き、登場ページ数をもっとも多い人物は、二代曲直瀬道三玄朔（正紹）である。

内儀をふくめ、家族ぐるみの交際は、玄朔が亡くなるまで続いた。①天正15年（1587）10月4日にはじまり、⑦寛永5年（1628）12月30日に至るまで、玄朔の登場ページは393頁にのぼる（付表1を参照）。（玄朔の内儀の初出は③慶長8.8.2）

付表1.主な医師の出現頁数

巻	年	頁数	宗巴	一溪	玄朔	正琳	盛孝	正円	玄益	玄由	全宗	宗恂	玄琢	言経
①	天正15年	80	1		2						2			
①	天正19年	68		2	5						8			
①	文禄2年	122	7	1	18						11			
②	慶長5年	148		1	22	2						13		9
②	慶長7年	155			28	3						16		14
③	慶長8年	136			32	6						4		3
③	慶長9年	152			21	5						6		1
④	慶長10年	142		1	25	1						1		5
④	慶長14年	168			43	3	2	7						3
⑤	慶長15年	182			61	6		9	14			5		
⑤	慶長18年	165			39	4	23	4	28	22			36	
⑥	慶長19年	152			45		15	4	14	27			28	
⑥	元和4年	155			33		2		11	17			28	
⑦	元和7年	158			10				8	18			19	
⑦	寛永5年	153			9					15			6	
	総計	2136	8	5	393	30	42	24	75	99	21	45	117	35

本能寺の変のあと、豊臣政権が安定すると、秀吉をはじめ要人の治療にあたる医師団すなわち「番医」制度が確立し、玄朔ら道三流の医師たちが番医に組み込まれた。

文禄の役では、孝蔵主や秀吉の番医たちが肥前名護屋城に移動している。

とくに玄朔は名護屋からさらに朝鮮半島にまで従軍している。

玄朔高麗ヨリ帰朝候間、為見廻ニ行、折ノ箱一遣候、他行也（文禄 2.3.15）

玄朔へ行テ逢、高麗ノ物語ヲ聞、書借（籍の誤りであろう）共一見候（文禄 2.3.20）

この記事から、玄朔が高麗から書物を持ち帰ったことがわかる<sup>6)</sup>。

#### 4. 施薬院全宗 一伴天連追放令の起草・時慶の老母と面識があった？

『時慶記』が幕を開ける天正 15 年（1587）、秀吉は伴天連追放令を發布した。そのため、イエズス会は恐慌をきたしている。

この伴天連追放令を起草した張本人が施薬院（三字で「やくいん」と読む）全宗である<sup>7)</sup>。

於殿上、薬院・延命院（玄朔）参会、数刻語、從 殿下 [秀吉] 依召、薬院ハ某ニ申置、御礼不申ニ退出候、陽明院 [正親町院] へ御礼間、帥局、縁ニ相待候（①天正 19.1.28）

全宗は、この頃、豊臣秀吉の侍医団すなわち番医たちの長老格<sup>8)</sup>であり、伴天連追放令に見られるように、秀吉の政治的なブレーンであったようである。文禄の役の際の戦いが停滞した文禄 2 年（1593）10 月にも、秀吉は全宗の屋敷に宿泊している<sup>9)</sup>。

全宗はもと比叡山の僧。元龜 2 年（1571）信長の焼き討ちにあい、還俗して一溪に入門した。秀吉の信頼はあつく、小西行長には全宗が口頭で伴天連追放令を伝えたという<sup>10)</sup>。

全宗と西洞院家の女性陣とくに時慶の老母（法名・寿溪）とは浅からぬ関係があったよう

である。老母寿溪については「時慶記のキリシタン(5)西洞院家の女性たち」に述べている。

薬院迄殿下〔秀吉〕御成ト云々、禁中往来者共為曲事（くせごと・犯罪）間、急度（きつと）可申付旨 殿下被仰出候、老母〔時慶母〕へ使者ヲ互ニ参候、見廻ノ義也（①天正 19.4.4）

この条は、全宗の屋敷に秀吉がやって来た、禁中に入内する者は処罰すると仰せられ、時慶と老母は互いに使者を送り合って見舞いを交わした、と解釈するのであろうか。

文禄の役するとき、時慶の女房衆から全宗に進物を送り、全宗からは返礼の進物が贈られた。名護屋へ進物焼物大貝一、薬院へ同一貝・文遣、女房衆ヨリ水引十把、孝蔵主へ文共日野〔輝資〕へ言伝（ことづて）候（①文禄 2.1.16）

従薬院〔全宗〕女房衆粽十把・干雪魚五枚・指樽被贈候、文女房衆ノ方へ到来候（①文禄 2.5.8）

興味深いのは、全宗の留守宅を老母が見廻（見舞）に行っていることである。

日坊城ヨリ預使者、太閤〔秀吉〕上洛ノ義ニ付テ、御迎ニ可罷出ヤ否ノ儀也、未各不定、薬院留守へ老母見廻候、庭ノ梢柿、又ムキ栗以下果子ノ箱一遣候（①文禄 2.8. 25）

老母と全宗は秀吉膝下で面識があったのだろうか。あるいは老母の娘すなわち時慶の姉妹などが全宗と婚姻関係にあったのかもしれない。

全宗はその後、徳川家康に仕えたとされるが、『時慶記』②～⑦には登場しない。

## 5. 寿命院秦宗巴 ―秀次事件に連座

秦宗巴（寿命院・立安）（1550-1607）は豊臣秀次（1568-1595）の筆頭番医である。

其ヨリ孫七郎（秀次）殿へ御供申、立庵〔秦宗巴〕ニ茶会アリテ、孫七郎殿被在由路次ニテ御聞付候間、則御成候、某モ御供申、鯉鮓アリ御酒出也、其後数シテ孫七郎殿御帰（①天正 15.6.20）

天正 15 年（1587）には、時慶は秀次に個人的にお供をするような間柄であった。

文禄 2 年（1593）には、宗巴の屋敷に出かけると、ちょうど秀次から呼び出しがあった。

寿命院（宗巴）へ鯉（ふな）十ヶ・昆布・樽遣候、尋行処へ殿下（秀次）へ罷出由也（①文禄 2.3.26）

この年 5 月 25 日には、聖護院道澄が主催の月次連歌の会に時慶・宗巴・秀次が揃って参加。馬に乗ってやってきた関白秀次が発句を担当した。6 月 19 日には、時慶が宗巴に使いを送り、「殿下（秀次）へ見廻可申に付也」と問い合わせた。越えて 10 月 30 日、公家仲間と昨日の能の御札を宗巴のもとへ言いに行った。11 月 11 日、「殿下（秀次）狩に御出の由候」、11 月 13 日、「寿命院（宗巴）へ見廻、折箱一遣、梅花一朵（いちだ）相添候」。

この長閑（のどか）な記事のあと、宗巴は『時慶記』に登場しない。

文禄 4 年（1595）7 月、秀吉は秀次を高野山に追い、切腹させる。世に言う秀次事件である。このとき、筆頭番医の宗巴も秀次に従い高野山にのぼっている。

## 6. 『言経卿記』の頭書にみる秀次事件の経過

公家衆のうち、宗巴ともっとも親しかったのは山科言経（ときつね）（1543-1611）である

う。『言経卿記』は秀次事件の経過やその後の宗巴の動向を事細かに伝えている。

関連する『言経卿記』の頭書（小見出し）を抜き出してみよう。※は筆者による記入。

文禄 3.1.28 秦宗巴に旧冬豊臣秀次より扶持米拝領の尽力を謝す（※言経は勅勘中）

文禄 3.9.8※ 大坂城で淀殿（淀君）が豊臣秀頼（おひろい）を出産

文禄 4.7.7 秀次に候す。秀次、病と称し何人にも対面せず

文禄 4.7.8 秀吉・秀次、去る三日以来不和、種々の雑説あり。秀吉、秀次を伏見に招致し、義絶して高野山に追う

文禄 4.7.9 世上雑説に就き、（石川？）家成に書を送り、秦宗巴・鳥養道晰に使を遣す。宗巴、秀次に扈従す（※宗巴も秀次に従い、高野山に向かった）

文禄 4.7.13 昨日殿下、高野山に禅定（瞑目）、御腹（切腹）被云々、言語道断也。御謀反（むほん）の必定由風聞也。

文禄 4.7.14 秀吉、秀次臣熊谷直之・栗野秀用・白江成定等を切腹せしむ

文禄 4.7.16 秀吉、秀次をして高野山に切腹せしむ。秀次に謀反の企ありと言ふ。秀吉臣木村常陸介切腹す。東福寺南昌院・虎岩玄隆、之に殉ず

文禄 4.8.2 豊臣秀吉、同秀次の子女三人並に妾三十二人を三条河原に於て殺さしむ

文禄 4.10.5 秦宗巴へ使を遣す。宗巴の身上未だ決せず（※連座処分が未決定）

慶長 1.3.28 秀吉、秦宗巴の私宅を没収す。宗巴を見舞ふ（※連座処分が決定）

慶長 1.11.15 豊臣秀吉、耶蘇教徒を処刑す。デウス僧及び日本人教徒共二十一人。耳を削ぎ京中を引廻す。大坂堺西国にて引廻し肥前名護屋にて磔にせんとす（※26 聖人の殉教）

慶長 2.8.9 秦宗巴に禄高（※家康の扶持）を送る（秀次事件の連座処分が恩免となる）

慶長 2.12.10 秦宗巴の堀出町の新宅を訪ふ。銭二百文を贈りて之を祝う。有職並に医書の事を談合す。曲直瀬盛孝（曲直瀬亨徳院家の祖）来会す

慶長 3.2.11 秦宗巴を訪ふ。『徒然草』の不審に答ふ。楽方の秘本を貸す。又医書の事を尋ね、薬箱を誂ふ（※秦宗巴には『徒然草寿命院抄』の著がある）

秀次事件から丸二年が経過し、連座処分が恩免となった宗巴は、以降、医業にも復帰している。かたわら、『徒然草』などの研究に余念のない日々を送った。

宮本義己「豊臣政権の番医—秀次事件における番医の連座とその動向—」<sup>[11]</sup>は、宗巴の動向および次項で述べる玄朔の配流について、数多くの史料をあげ、詳細に記述している。

宗巴は、全宗、玄朔とならぶ、一溪から直接教えを受けた直門（じきもん）の秀才である。はじめ吉田宗桂に入門したものの、宗桂から「汝才能もっともおほし。我が弟子の列に有るべからず」と言われ、一溪のもとで学んでいる《寛永諸家系図伝》。

## 7. 二代・曲直瀬道三玄朔 [その2] —秀次事件で常陸国に配流

秀次事件に連座し、豊臣政権の番医である玄朔は「流罪となって、常陸の水戸城主・佐竹義宣のもとに追放された」<sup>[12]</sup>。この時、玄朔の家屋・家財も没収されたという。

宮本義己の所論に依拠して、玄朔の場合の連座の経緯をおってみよう。

玄朔が秀次と個人的に交際していたことは、文禄 2 年（1593）の次の記事からわかる。

道三（玄朔）へ関白殿（秀次）申入、御能被遊候、見物に出仕、聖護院殿御成、又菊亭（晴季）殿も日野・烏丸・広橋・飛中將・六条・阿野等也、又右衛門督は少遅し、紹巴・昌叱・休庵・薬院（全宗）等相伴也（①文禄 2.11.7）

秀次は玄朔に申し入れ、玄朔の自邸で能を舞い、時慶をはじめ大勢の公家や連歌師、薬院つまり施薬院全宗などが見物し、秀次と夕食を相伴した。

秀次事件のあと、この参加者のなかでは、右大臣の菊亭晴季は越後国へ配流。秀次の正室である晴季の娘・一の台（一の御台所の略）は死を命じられた（逃亡説もある）。新在家に住む連歌師の里村紹巴は近江国園城寺（三井寺）で蟄居となっている。

玄朔が、秀次の筆頭番医である秦宗巴よりも重い流罪という処分を受けたのは、伏見で秀次が発病したとき、ほぼ同時に後陽成天皇も発病し、玄朔が秀次の診療を優先して、「天脈拝診」を怠ったためであると宮本義己は述べている。

曲直瀬一門と施薬院全宗の尽力により、二年後に玄朔は赦免された<sup>[13]</sup>。

その後、玄朔は豊臣秀頼の番医となって復権している。

大坂冬の陣・夏の陣を経て、元和偃武（えんぶ）ののちは、宗恂と同じように徳川將軍家に仕えた。玄朔自身はこのような波乱に富んだ人生を「塞翁が馬」と評している。

配流中に嗣子・元鑑に宛てた「捷書（おきてがき）」には、今後の相談相手として、曲直瀬正琳（養安）・曲直瀬正純（亨徳院）・吉田宗恂（意庵）・秦宗巴（立安）の四人の名をあげている。四人のなかでは、必ずしも道三流医術とは言い難い吉田宗恂（1558-1610）を玄朔があげていることが注目される。玄朔と同様、宗恂も秀次に仕えていた《寛永諸家系図伝》。

義父の一溪がキリシタンとなった玄朔。実の父親の宗桂がパウロという法名のキリシタンと見られる宗恂。二人をつなぐ線上にはキリスト教の信仰が見え隠れしている。

## 8. 秀次謀反説と心身不安定説

ここで改めて秀次事件が起こった理由を探ってみよう。

『言経卿記』の文禄 4 年（1595）7 月 16 日条の「秀次に謀反の企てありといふ」のように、秀次が秀吉に謀反をくわだてたので、一族もろとも極刑を受けたとする謀反説は、文禄慶長の時代から現在に至るまで有力な説となっている<sup>[14]</sup>。

謀反説は昭和 4 年のステイシエン著<sup>[15]</sup>ビリヨン訳<sup>[16]</sup>『切支丹大名史』<sup>[17]</sup>に見えている。

（秀次は）秀吉の一子秀頼はやがて我より関白の位を奪うであろう事を思患し、密かに諸侯を誘引して己れに加担せしめたのであった。此の時毛利輝元（石田三成の讒言とする書もある）は秀次に忠誠を誓ひながら之を太閤に密告したのである（第 13 章）。

宮本義己によれば、秀次は、淀殿（淀君）が秀頼を懐妊した頃から鬱病で心身不安定であった<sup>[18]</sup>。懐妊の一年前、『時慶記』文禄 2 年（1593）8 月 10 日条には、秀次の奇矯な振る舞いが記されている。

早辰聚楽御会ニ参候、歩行ニテ、紹巴・昌叱・堂上衆同心候。殿下（秀次）ハ御不例ノ由ニテ無御出座。半（なかば）ニソト（そっと）御出ニテ対面候、信良ト云法師御折檻ノ儀、御機嫌悪由候（①文禄 2.8.10）

秀次は聚楽第の自邸で開いた月次連歌会に病と称して欠席したが、会の途中で音もなく

あらわれ、信良という法師を折檻するなど機嫌が悪かった。

ただし謀反であれば、切腹という武士らしい最期を命ぜられるはずがない、という反論も可能である。関ヶ原の合戦で敗れた小西行長、石田三成は、謀反人として京都六条河原で斬首されている。

宮本義己は、この年（文禄4年）の7月3日になされた「秀次の実に唐突な朝廷への白銀五千枚（四千八百枚とも）<sup>[19]</sup>の献金」は、玄朔配流の理由となった「天脈拝診」の怠業に関わっているのではないかと見ている。すなわち「秀次処罰の直接的理由」は、天皇と関白の序列を無視した「天脈拝診」怠業と、その結果「朝廷へ納めた多額の献金」にあった、としている。

## 9. 秀次切腹事件の真相

山本秀焯著『日本基督教史一足利末葉より安土桃山時代の終まで』は、「関白秀次の如き人すら健達（こんたつ）即ち天主教徒の用いる珠数（じゅず）を胸間に掛けて得々たりしと云へば其他は推して知るべきなり」と、秀次がロザリオを首に掛けていたとしている<sup>[20]</sup>。

ただし秀次には30人以上の女房衆（妻妾）がおり、一夫一婦制を厳格に守るカトリックの信者にならなかった（なれなかった）ことは明らかである。カトリックは自害を禁止しており、秀次が切腹したことからも、秀次はキリシタンにならなかった、と判断できる。

昭和戦前には秀次キリシタン説が有力であった。

大正15年（昭和元年）の松崎実著『考注・切支丹鮮血遺書』には、「…黒田孝高、小西行長、蒲生氏郷、高山右近などの重臣、曲直瀬道三の如き秀吉側近の医術の名家、更に進んでは秀吉の甥にして其の養嗣子たるべき秀次までも信徒になった」とある。

昭和15年の荒原不死生著『東洋基督教史』は「関白豊臣秀吉」の項に「切支丹の信仰を受け入れたが、洗礼の所は判名しない。〔彼が切支丹とならざるを得ない理由はその有力なる側近者の顔振れを見ればわかる〕。一説にはフロエーから受洗したとも云われる」。

上に紹介したように、秀次がキリスト教に興味をもち、南蛮文化に関心を寄せたのは事実であろう。

非常に大胆な想像（？）をおこなえば、秀次切腹の一年半前、文禄3年（1594）2月、満開の吉野の桜の下に浮かれ出た秀次は、秀吉に「キリスト教の信者になりたい」と告白したのではないだろうか。

明の征服のために朝鮮に出兵した秀吉にとって、戦況の進展と秀頼の将来は、大きな不安材料であった。そのさ中、東洋とは異質なキリスト教文化を持ち込もうとする秀次の申し出に、秀吉は、「この男はいずれ除去しなければならない」と思ったのではないだろうか。●

### 【注】

[1] フロイス『日本史前篇第22章』高市慶雄訳、日本評論社昭和7年144p。中公文庫の松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス日本史1 織田信長篇I』には英文表記はなく、「パウロ・イエサン」としている。同書45pは「たまたま山口出身のキリシタンに出会った。彼は身分のある人で、国主〔大内義隆〕の死に際して、放逐されて来た非常に良き医師であった。彼はパウロ・イエサンと称し、非常に賢明で識見

- ある人物で、すでに五十歳を過ぎていた」。また、紹介状に関して同書 46p は「パウロは言った。…建仁寺という寺にいる永源庵なる高僧宛の私の紹介状を携えるがよろしかろう。彼はその地（都）において、なにか御身らが困ったことがあれば、好意をもって助けてもくれようから、と」としている。
- [2] 姉崎正治が 1559 年の参照文献として挙げた Charlevoix の『Histoire du Japon.Paris,1754 (日本の歴史)』、Delplace の『Le Catholicism au Japon. Malines,1910 (日本におけるカトリック教会)』は未見。
- [3] 海老沢有道『切支丹の社会活動及南蛮医学』富山房 1944 年、251p は姉崎正治の宗桂＝パウロエサン説に対して、「年代はほぼ一致するが、エサンと同一人物とするには史料的に甚だ無理と言わねばならぬ」としている。また、パウロエサンは永禄 6 年 (1563) 肥前口ノ津で開業した、とも指摘している。ただし、二度の渡明の際、遣明船を何度か派遣している大内義隆の力を借りたことは事実であろうし、医師である宗桂が薬種 (薬剤の原材料) を求めて山口や堺を訪ねることも十分あり得る。細川氏の菩提寺である建仁寺永源庵へ紹介状を書くことも、代々足利将軍家の侍医であった吉田宗桂であれば、可能であろう。肥前口ノ津で開業したエサンは別人ではあるまいか。
- [4] 元龜 2 年 (1571) に正親町天皇に献じられ、その命により天正 2 年 (1574) 策彦周良が序文を書いた。
- [5] 十念寺が現在の地に移る以前は誓願寺の境内にあったことは、「時慶記のキリシタン(3)曲庵と呼ばれた人々」に述べている。
- [6] 朝鮮派遣軍の総大将・浮田秀家が秀吉に謁したとき、傍らの曲直瀬正琳 (玄朔の弟子。養安院) が秀家に凱旋土産として朝鮮本をねだり、秀家帰陣の際、国都漢城で得た書物をことごとく正琳に贈ったという (新村出『南蛮広記』)。海老沢有道『南蛮学統の研究』116p に「東京教育大学図書館蔵書の朝鮮初版『算学啓蒙』に養安院蔵書の印がある」とあることを平山諦『和算の誕生』6p が指摘している。
- [7] 施薬院全宗が伴天連追放令を起草した、とする説の起源は、コエリヨ神父の報告にある。箱崎滞留の秀吉を慰めるために全宗が美女狩りをおこなったが、殆ど全員キリシタンであり、逆に全宗を面罵したため、全宗は「秀吉の周囲からキリシタンを一人残らず取り除こうと欲していた」、「それが施薬院全宗の口と筆を通して秀吉の憤怒の夜に表現されたものであろう」と海老沢有道『切支丹史の研究』(昭和 17 年 140 p, 169 p) は推定している。海老沢有道は同書 169 p で「施薬院起草の (伴天連追放令の) 条文」と明言している。コエリヨ神父の報告は、クラッセ『日本西教史』、スタイシェン『切支丹大名史』、ヴィリヨン『日本聖人鮮血遺書』にも引用されている。
- [8] 村上直次郎訳注『耶蘇会の日本年報第 2 輯』昭和 19 年 214p の「1586 年の報告書」には「侍医の頭 (かしら)」とある。
- [9] 文禄 2 年 10 月 8 日条に「太閤は薬院に御座、孝蔵主へ文共遣候」、同年 10 月 10 日条にも「孝蔵主より錫被預、太閤は薬院へ午刻に御越と」とある。
- [10] 安野眞幸「伴天連追放令の研究」弘前大学・文化紀要 14, 1980.
- [11] 宮本義己「豊臣政権の番医—秀次事件における番医の連座とその動向—」国史学会「国史学」133 号。1987. 58p-88p.
- [12] 同上論文。
- [13] 田端泰子「『玄朔道三配剤録』と『医学天正記』から見た曲直瀬玄朔一門の患者とその時代—とくに秀吉の番医制との関係を軸に」女性歴史文化研究所紀要第 21 号, 2014.
- [14] 桑田忠親は岩波文庫版『太閤記』の解説 (昭和 16 年) で「文禄四年七月、秀次が謀反の廉 (かど) で罰せられる」と書いている。
- [15] 著者ミッシェル・シュタイシェン神父 (1857-1929) はパリ外国宣教会の会士。ロンドン留学をへて 1885 年に原著を英仏両語で出版した。1887 年来日。
- [16] 訳者エメ・ヴィリヨン神父 (1843-1932) もパリ外国宣教会の会士。シュタイシェン神父より 20 年早く明治維新の 1867 年来日し、大正 15 年の『日本聖人鮮血遺書』や昭和 4 年の『切支丹大名史』の翻訳・刊行に尽力している。日本で集めた膨大な資料は関東大震災で失ったという。
- [17] 『切支丹大名史』三才社、昭和 4 年。
- [18] 宮本義己「豊臣政権における太閤と関白—豊臣秀次事件の真因」国学院雑誌 89 (11) 1988.
- [19] 仮に銀子一枚 (一両) を現在の 10 万円とすると、秀次は朝廷に 5 億円支払ったことになる。河内将芳『落日の豊臣政権 秀吉の憂鬱、不穏な京都』吉川弘文館 2016, 24-29p によれば、『蓮成院記録』天正 17.5.27 条に、秀吉が金子 4,900 枚、銀子 21,100 枚を諸大名・公家に「かたみ分け (御遺物)」として配った、とある。つまり秀次より 9 年はやく大金 (たいきん) の「金くばり」を秀吉はおこなっている。ちなみにこのとき、西洞院時慶も銀子 5 枚をもらっている (『時慶記』は欠落年)。
- [20] 山本秀煌著『日本基督教史—足利末葉より安土桃山時代の終まで』新生堂, 1925. 381p.